松本清張「或る「小倉日記」伝」と『鷗外全集』

――「無名」の読者としての田上耕作――

吉野　泰平

「或る「小倉日記」伝」[1]において、「田上耕作」は「孤独」である。「轗軻不遇の生涯」[2]、「被疎外者」[3]、「世間から疎外され、孤独と憂悶を抱えた耕作」[4]、「世間から白眼視されながらひたすら鷗外の事蹟を追う主人公」[5]といったように、このことは従来の論においても様々な言葉で語られてきた。

ただ、「孤独」が強調されるあまり、「田上耕作」の生涯が、鷗外研究の状況と関連づけられながらえがかれていることが見過ごされてきたのではないか。実在した田上耕作という人物をモデルにしたこの小説には、「田上耕作」が森鷗外と関わりのあった人々からの聞き取りを中心とした研究を深めていく様子がえがかれている。その研究のきっかけとなったのは、岩波書店版第一次『鷗外全集』だった。この全集の刊行を契機に起きた「鷗外ブーム」[6]と時を同じくして「田上耕作」の研究は始まっているのである。

本稿では「或る「小倉日記」伝」において重要な役割を果たしている『鷗外全集』に着目する。参照するのは岩波書店版第一次『鷗外全集』のみではない。この小説の冒頭には、戦後に発見され、岩波書店版第二次『鷗外全集』に収録されることでその全貌が初めて明らかになった「小倉日記」の引用が置かれている。このことは、この小説が『鷗外全集』という背景の上に成り立っていることを端的に示してもいるだろう。しかし、『鷗外全集』との関わりはそれだけにはとどまらない。本稿では、従来顧みられることのなかった『鷗外全集』の系譜との繋がりを明らかにすることによって、「或る「小倉日記」伝」を新たな視角から照らしだしたい。

『鷗外全集』は、「或る「小倉日記」伝」が発表された時点で四種類刊行されている。鷗外全集刊行会正規版『鷗外全集』全一八巻（一九二三年一月～一九二七年一〇月、月報なし）、鷗外全集刊行会普及版『鷗外全集』全一七巻（一九二九年六月～一九三一年一一月、月報『鷗外全集月報』）、岩波書店版第一次『鷗外全集』著作篇二二巻・翻訳篇一三巻（一九三六年六月～一九三九年一〇月、月報『鷗外研究』）、岩波書店版第二次『鷗外全集』著作篇三三巻・翻訳篇一八巻（一九五一年六月～一九五六年二月、月報『鷗外全集月報』）の四種

類である。煩を避けるため、本稿ではこれらの『鷗外全集』をそれぞれ刊行会正規版全集、刊行会普及版全集、岩波版第一次全集、岩波版第二次全集と呼ぶこととする。

一　松本清張と岩波版第二次全集

晩年、松本清張は「私はバッグの中に『鷗外全集』（岩波書店。昭和二十六～三十一年版）を三冊ほど入れてきている」[7]と書いている。見逃せないのは、意識的に付された「岩波書店。昭和二十六～三十一年版」という部分だろう。このように、岩波書店版第三次『鷗外全集』の刊行後も、岩波版第二次全集を愛用していた松本清張にとって、『鷗外全集』は版ごとに異なる意味をもっていたのではないだろうか。

「或る「小倉日記」伝」は岩波版第二次全集の刊行中に発表された。それはこの全集に「小倉日記」が収録されたという意味においても重要だ。「「小倉日記」があったとされながら、長い間紛失したままのところ、戦後になって疎開先から持ち帰った遺族の荷物のなかから偶然に発見され、昭和二十七年一月当時刊行中の「鷗外全集」（岩波版）の第三十巻に収められ初めてこの日記が世に出たのであった。（中略）こうした事情があったればこそ、松本清張の第二十八回芥川賞受賞作「或る「小倉日記」伝」（『三田文学』一九五二（昭27）年九月）が書かれたわけでもある」[8]。

ただ、岩波版第二次全集の「月報」との関わりについては、いまだ論じられていない点が多い。一九五二年一一月の月報には、岩下俊作が「田上君が不自由な身体で調査し研究したのは小倉時代の鷗外先生のことであつた（中略）このいきさつについて友人松木（ママ）清張君が小説を書き「三田文学」に発表されることになつてゐる」[9]と書いている。この文章の掲載が「或る「小倉日記」伝」の発表後になったとはいえ、『鷗外全集』の月報という場で「或る「小倉日記」伝」という小説の存在が周知されていたのである。

岩下俊作は、「江南町の岩下宅に行き、自分はノートに書いた小説の下書きを朗読して聞かせ、彼の感想を求めること一再でなかった。（中略）ある晩、ノートに書いた「或る『小倉日記』伝」を朗読したところ、「文学的な作品にしようとして最も悪いところが出ている」との岩下評が印象に残る」[10]とあるように、この小説の成立過程に深く関わった人物だった。その岩下俊作が、月報に文章を載せていること、そして、「先生の小倉日記が発見された今日、田上君の研究と小倉日記とを対照したら随分面白いものになるだらう」[11]と述べていることは、岩波版第二次全集と「或る「小倉日記」伝」を繋ぐものとして注目されるだろう。

さらに、月報二五号には、松本清張が鷗外と面識のあった人々に聞き取り調査を行った成果を、「私註「小倉日記」抄」と題して発表している。この中では「日記の中に三樹亭の名はしば〳〵出てくる。三樹亭は当時の所謂西洋料亭である。先生（引用者注―鷗外）はよくこゝに出かけた。そこに美人姉妹娘がゐた。（中略）先生はこの娘が気に入つてゐて、よく三樹亭の卓によんでは話してゐたが、この時も一人だけといふことはなく、必ず妹も一緒に呼んだ、とは当時先生と親しかつた麻生作男翁の話である」[12]と調査の結果が記されている。

ここで挙げた箇所は、「或る「小倉日記」伝」中の「耕作は柳河から帰ると、麻生の話を整理した。／直接鷗外に接触していただけに麻生作男の話は期待以上のものがあつた。（中略）三樹亭という料亭があつて、こゝの娘が先生は気に入つてよく出かけていたが、決して一人だけを呼ぶという事はない、いつもその妹娘と二人をよんでいました」という記述と対応している。松本清張自身の調査が「或る「小倉日記」伝」に生かされていること、そして、この小説と『鷗外全集』との深い関わりがうかがえる。

「私註「小倉日記」抄」には、この「姉妹」の他にも、「もとの家主の宇佐美さん一家は、今も隣家に住んでゐる。現在の老婦人は、幼児の頃、先生に菓子など貰つて、可愛がられた」、「月報18に岡崎義恵氏の「十人の婢」といふ興味深い一文があつた。／元といふ婢は先生にまめ〳〵しく仕へ、先生の心に叶つたようである」[13]と、「宇佐美さん一家」や「元」といった鷗外の周辺にいた「無名」の人々への関心が見てとれる。そして、「或る「小倉日記」伝」でえがかれる「田上耕作」もまた、「無名」の鷗外研究家であった。

二　「田上耕作」と岩波版第一次全集

岩波版第二次全集の刊行中に発表された「或る「小倉日記」伝」だが、小説中に登場するのは主に岩波版第一次全集である。「その頃、岩波版の「鷗外全集」が出版された。昭和十三年頃である」という記述からもそれは明らかであるが、注目したいのは全集に関する次のような記述である。

「鷗外全集」第二十四巻後記は、鷗外の小倉時代の日記の散逸した次第を載せている。

鷗外は明治三十二年六月、九州小倉に赴任した。以来三十五年三月東京に帰るまで満三ヶ年をこの地で送つた。この時代につけていた日記は人に頼んで清書し保存していたが、全集を出すときに捜してみても所在が知れなかつた。日記があつたことは、観潮楼の書庫の一隅にある本箱の中でみたと近親者はいつている。誰かゞ持出したまゝ行方が分らなくなつたという。（中略）

耕作の心を動かしたのはこの事実を知つてからだ。幼時の伝便の鈴の思出を図らずも鷗外の文章で甦つて以来、鷗外を読み、これに傾倒した。いま、「小倉日記」の散失を知ると、未見のこの日記に、自分と同じ血が通うような憧憬さえ感じた。

ここで言及されている「後記」とは、正確には『鷗外全集　著作篇　第二十巻』の森於菟「後記」である。「「小倉日記」は私も見た記憶がある。それは本郷区千駄木町の観潮楼の一隅にあつた古い土蔵の中であつた。（中略）その本箱の一隅に、半紙に細い毛筆で叮嚀に認めた父の日記が数冊あるのを私は見出した。（中略）この日記は後に小倉時代から父と親しく交はつた某氏が借り出してそのままになつた」[14]とあるのが参照された箇所だろう。

重要なのは、「耕作の心を動かし」、調査へ向かう契機となったのが、鷗外によって書かれた全集の「本文」ではなく、全集の「後記」であるという点である。

「個人全集」を構成する文章のなかで、例外的にその全集を「統括する主体としての個人ないし「作家」[15]」以外の署名が付されるのが「後記」と「月報」の文章である。これらは、「本文」を補完する存在であると同時に、「本文」とは異質な存在でもあるのだ。次の引用からもわかるように、「或る「小倉日記」伝」において「田上耕作」が行っているのは、「個人全集」における「本文」以外の部分を読むという行為なのである。

「鷗外全集」をみると、鷗外が小倉時代に書いて地元紙に発表したのは次の通りだ。

「我をして九州の富人たらしめば」
——明治三十二年　福岡日々新聞
「鷗外漁史とは誰ぞ」
——明治三十三年　福岡日々新聞
「小倉安国寺の記」
——明治三十四年　門司新報
「和気清麻呂と足立山と」「再び和気清麻呂と足立山と」
——明治三十五年　門司新報

耕作が考えたのは、鷗外の原稿は当時新聞社の小倉支局が連絡に当つたかも知れないことだつた。

「「鷗外全集」をみると」という前置きとともに提示されているが、ここで参照されているのも鷗外自身の文章ではなく、『鷗外全集　著作篇　第十八巻』に付された斎藤茂吉の「後記」[16]に記された情報だろう。

ここで為されているのは、全集の本文から鷗外像へ迫ることではなく、全集の「後記」から「連絡に当つたかも知れない」、過去の「新聞社の小倉支局」の存在を感知することである。岩波版第一次全集の「後記」という本文以外の部分から始められる調査が、「無名」の人々の姿を浮かびあがらせようとしていることには注目すべきだろう。

なぜならば、小説中の「田上耕作」のモデルとなった実在の田上耕作という人物こそ、『鷗外全集』の成立に関わった「無名」の人々の一人だからである。

三　田上耕作と刊行会普及版全集

最初の『鷗外全集』である刊行会正規版全集は、鷗外が亡くなった翌年から刊行され、関東大震災による資料の焼失などの困難を乗り越えて完結した。[17] この全集の編纂委員は鷗外と生前交流のあった人々で構成されているが、この全集の成立に関わったのは、与謝野寛を中心とする編纂委員として名前が残っている人々だけではない。結論を先取りすれば、『鷗外全集』は「読者」との交渉によって完成していった書物だったのである。

刊行会普及版全集の完結を前にして書かれた森潤三郎「読者諸賢に」は、刊行会版全集の編纂過程を振り返る。まず「何分深刻なる不況時代に遭遇した為めに、為事が思ふ様に進捗せず、非常に期限が延びたのは誠に申訣の無い事で、厚く御詫びを申上げる」[18]という「御詫び」からは、国民図書株式会社、春陽堂、新潮

社の三社が合同していた鷗外全集刊行会から一九三〇年六月に国民図書が脱退するといった不安定な刊行状況がうかがえる。[19]

さらに、「読者諸賢の好意並にわたくしが編纂の相談相手になつて頂いた与謝野寛先生、船越政一郎氏、岩田準一氏の努力に依つて、現在手元に集まつたものが、普及版で概算千三四百頁に達する有様で、第十七巻には史伝篇と人文篇とだけよりは収め兼ねる次第である[20]」とある。刊行会版全集は刊行と資料の収集が並行して行われていたが、結局集めた全ての資料を全集へ収めることが出来ずに完結した。ここで興味深いのは「読者諸賢の好意」によって資料の収集が行われていたという点である。

刊行会普及版全集の月報第一号には、「先生の書かれた序文、跋文、漢詩、和歌、碑文の如きは、如何程あるか見当が附かぬ。読者諸君で右のものを心付かれたらば、本会編輯部に宛てゝ御通知を願ひたい。編輯部に於て精査した上で、未採集のものは全集に加へ、貴名をこの月報上に報告して感謝の微意を表したいと思ふ[21]」とあり、編輯部から読者へ向けて資料の提供が呼びかけられている。

そして、注目したいのは翌月発行の月報第二号である。

> 普及版刊行の事発表せらるゝや、（中略）各地の読者からは、編輯部に向けて編輯の注意及び希望、前版の誤植、佚文の報告等が殺到して、編輯部ではその熱心に刺激せられ、頗る緊張して仕事に従つて居る。左にその二三の要点を掲げて、聊か感謝の意を表する。
>
> 一、北海道旭川の弁護士山崎有信氏は能久王事蹟の誤植その他を指摘せられた。
>
> 二、長野の国見米太郎氏は歌日記その他に就きて示教された。
>
> 三、小倉の田上耕作氏は小倉在住時代の著作に就きて注意された。
>
> 四、調布の笹島重勝氏は「陣中三人記」の出た雑誌新青年の借用を快諾された。[22]

「三」に示されているように、「佚文の報告等」をした人物の中に田上耕作の名前があるのだ。これについては、従来の研究においては全く知られていなかったが、田上耕作という実在の人物をモデルにした「或る「小倉日記」伝」について考える上で重要な事実だろう。田上耕作は刊行会普及版全集の編纂に協力した「読者」の一員だったのである。

もちろん、資料収集で中心的な役割を果たしたのは森潤三郎や鈴木春浦だったことを忘れてはならないが、全集という書物が編纂委員と読者たちとの協働によってつくられたといえるだろう。その一端は「読者諸君と全集刊行会との意志を疎通せしむる機関[23]」と位置づけられた月報上の文章にうかがうことができる。

例えば、編輯部から読者へ次のような依頼がなされる。「鷗外先生の翻訳小説中、前版全集に入らなかつた分で、今度普及版の第十三巻に収むべき露国作者の（中略）初出がまだ分らぬ。読者諸賢の中で御承知の方があつたら、至急当部に御知らせを願ひま

す[24]」。

すると、「月報第八号の本欄に掲げて示教を求めた露国小説翻訳の初出のうち、／鰐　笑　フロルスと賊と　馬丁／の四篇は、大阪の船越政一郎氏から詳しく通知された、此処にその好意を深謝しその他の分も諸賢の報告を得んことを希つて置く[25]」といったように、読者から情報が提供される。

このように本文以外の「全集」の構成要素である月報という場を通して編輯部と読者との双方向的な関係が結ばれていたこと、そうした交渉を経て刊行会普及版全集が編まれていったことは見逃せない。田上耕作もその内に含まれる「読者」たちは、決して全集という書物を受け取るだけの存在ではなかったのである。

こうした「読者」の代表格としては、先に引用した月報にも登場する「大阪の船越政一郎氏」が挙げられるだろう。「計画の当初に於て材料の蒐集に重きを置かなかつたことは、やはり大間違ひであつた。それ故に我我は大苦しみをしてゐる。潤三郎さんや鈴木春浦君は各所の図書館へ日参して居られる。大阪の船越さんのような特志の方が現はれてそれを遙に援助せられるのみか、時時出京せられては打合さへせられる必要が起つて来たのである。新らしい材料がそめ為めに跡から跡から発見せられる。それが各受持の編輯者の手元に送られて排列せられる。これが鷗外全集編輯のからくりである[26]」。この平野万里の証言からもわかるように、船越は編纂作業にかなり深く関わっていたようである。しかし、編纂委員として名前が残っているわけではない。

この他にも、与謝野寛が「「鷗外全集」の十八巻までを完成するに就いて、先生の御交友間、其他先生を敬慕せられる読書家諸君より、多大の御援助を受けた。大坂の船越政一郎先生、伊勢の岩田準一郎氏の如きは、旧時の刊行にして希覯に属する単行本及び雑誌より先生の遺篇を見附けて送られ、また著作の年月、所載の刊行物名等を報道せられること屢であつた[27]」と「読書家諸君」の存在にも触れている。

さらに、小島政二郎は船越政一郎に対する賛辞を惜しまない。「大阪の船越政一郎氏がある。この人は、私の知れる限りに於ては我国第一の鷗外学者であらう。先生の著書なら殆んでも持つてゐる。未定稿ながら先生の著作目録を作つて持つてゐる（中略）氏（引用者注―船越政一郎）の好意と助力と提供とを得て、「鷗外全集」――さう云つて悪ければ、少くとも私の受持つてゐる分だけは、最後の仕上げをなすことが出来るやうに思ふ[28]」。この言葉からは船越政一郎の果たした役割の大きさがうかがえるだろう。

刊行会普及版全集は「各地の読者」たちの助力なくしては成立しなかったのである。そして、田上耕作もまたこの全集の編纂に寄与した「読者」の一人であった。『鷗外全集』は名前の残る編纂委員以外、すなわち「無名」の「読者」たちの協力を得て誕生したのだった。そうした人々の一人である田上耕作の姿をえがく「或る「小倉日記」伝」は、「無名」の「読者」の姿を浮かびあがらせる試みでもあったのである。

四　『鷗外全集』と「無名」の人々

「或る「小倉日記」伝」において、「田上耕作」の鷗外との出会

いは「耕作の中学時代からの友人」であり、「文学青年で、この地方の商事会社に勤め乍ら、詩など書いていた」という「江南」がきっかけとなる。「一冊の小説集」に収録されていた鷗外「独身」が「田上耕作」の「心を打」つ。そして、「伝便の講釈がつい長くなつた。小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりんと急調に聞えるのである」といった「独身」の「一節」が引用された後に続くのは、「耕作は幼時の追憶が蘇つた。でんびんやのじいさんや女の児のことが目の前に浮んだ」という「田上耕作」の記憶である。

ここでも、鷗外の小説から「田上耕作」がまず想起するのは「でんびんやのじいさんや女の児のこと」であり、一つの「鷗外」像を形づくる方向へと収斂していくことはない。そして、「田上耕作」の関心は岩波版第一次全集を起点にしつつも「無名」の人々へと拡散していくようなありかたを示していくのだ。

ただ、実際に岩波版第一次全集の月報を見ていくと、刊行会普及版全集で強調されていた「無名」の読者たちとの協力関係は後景に退いている。そうした変化を象徴しているように思われるのが、最初の月報から五回にわたって掲載された「諸家の鷗外観」[29]という企画である。

小説家に限らず、様々な領域の著名人計九十三人の「鷗外観」が披露されるこの企画のねらいは、「有名」な人々の賛辞を得て「真に日本的にして世界的大さを有する唯一の文学者」[30]としての鷗外像を強化することだろう。そこでは、「多くを読んで居りません」（江戸川乱歩）[31]、「私の趣味に合ひませんので、多く読みません」（青木正兒）[32]といった言葉が散見されるように、鷗外に関する知見よりも書き手が「有名」であることが重視されている。

しかし、岩波版第一次全集にも鷗外への情熱をもつ「無名」の「読者」たちは間違いなく存在した[33]。そして、この全集の刊行時期とも重なる昭和十三年に『森鷗外居住の趾』の標木を小倉に建てた[34]実在の田上耕作もおそらくその一人だっただろう。そして、「或る「小倉日記」伝」は、岩波版第一次全集を読む「田上耕作」をえがき、全集が整備されるにつれて見えにくくなっていった「無名」の「読者」の存在を再び浮かびあがらせるのだ。この小説が前景化するのは、「有名」な人々の言葉を通してつくられる鷗外像ではなく、あくまで「田上耕作」を中心とした「無名」の人々の姿なのである。

このことを裏書きしているようにも思えるのが、木下杢太郎の名前のみが「K・M」というイニシャルで示されることである。「或る「小倉日記」伝」の発表時、既に『木下杢太郎全集』（岩波書店　一九四八・七～一九五一・一〇）が刊行されていたし、小説中にも「耽美的な詩や戯曲、小説、評論などを多く書いて有名だつた」（傍点引用者）とえがかれる。「Kも編纂委員である岩波の「鷗外全集」」といったように、岩波版第一次全集の編纂を担ったことも明示されている。「編纂委員」として名前が残る「有名」な木下杢太郎ではなく、「無名」の「田上耕作」の名前を強調するという姿勢がうかがえるだろう。

ここで想起されるのは、「或る「小倉日記」伝」が「名前」へのこだわりを見せる小説でもあることだ。まず、初出の「三田文

学」版と芥川賞受賞後の「文藝春秋」版の間に大きな異同があることはよく知られており、詳しくは山崎一穎[35]が整理している通りだが、特に大きく変化しているのが人物の名前である。「田上耕作」は初出において「上田啓作」だったし、「江南鉄雄」は「津南」、「白川慶一郎」は「須川安之助」、「玉水アキ」は「玉水ハル」、「麻生作男」は「麻尾咲男」だった。

そして、この小説における「田上耕作」の調査もまた、「無名」の人々の名前を探すものであった。「麻生作男」という名前は次のように探し出される。

> 明治三十二、三年頃の小倉支局長で、名前と、若しまだ存命であれば、その住所が知りたいと、新聞社の総務課宛に郵便でき、合せた。
>
> この返事に期待することは殆ど不可能だつた。五十年に近い昔の一地方支局長の名をいまだに新聞社は記録に残しているであろうか。而も社は途中で組織が変つているのだ。（中略）
>
> しかし、しばらく経つて届いたその返事をみると、奇蹟というに近い感じだつた。
>
> 「調査の上、明治三十二年――三十六年の小倉支局長は麻生作男。現在、当県三潴郡柳河町の寺に居住の由なるも、寺名不詳。」

麻生作男も岩波版第二次全集の月報に「小倉の森先生[36]」という文章を寄せている実在の人物である。大塚美保が「耕作の〈採集記録〉の間から立ち上ってくるのは、発見された『小倉日記』からは決して得られることのない情報の数々である[37]」と指摘しているように、「田上耕作」の調査は「『小倉日記』の空白を埋める」だけにはとどまらない。無名の人々の名前を集めていくこの調査は小倉時代の鷗外の姿を明らかにするだけではなく、発見することが「殆ど不可能」な「無名」の人々の「名前」を「奇蹟」的に見つけ出していくのだ。「全集」という形で決してまとめられることのない人々の姿をも同時に浮かびあがらせていくのである。存在すら忘れ去られた「魚板」も、「田上耕作」にとっては人々の記憶を呼び起こすための「痕跡」となる。

> 魚板は古くて黒くなつていた。寄進者の名は探してやつと判読出来る程である。が、その名前を見て耕作は息を詰めた。
>
> 寄進
>
> 玉水俊虡　森林太郎　二階堂行文　柴田董之　安廣伊三郎　上川正一　戸上駒之助
>
> 思いがけない発見に耕作はよろこび、手帳に書写した。これは重要な手がかりだつた。

ここで明らかになった名前から調査が進み、「二階堂は門司新報の主筆です。柴田は開業医、安廣は薬種屋、上川は小倉裁判所の判事、戸上は市立病院長です」と、じょじょに人々の姿が立ちあがっていく。先述の通り、この調査の起点には岩波版第一次全集があるが、そこから鷗外だけではなく、「無名」の人々の姿を読

み取ること、それがこの小説に一貫して表れる『鷗外全集』の読み方なのである。そして、岩波版第一次全集を起点に調査を進めた「田上耕作」と、岩波版第二次全集とも関わりながら田上耕作という人物を浮かびあがらせる松本清張もまた、「無名」の人々の痕跡を読みとろうとする姿勢において重なりあっているのだ。

最終的に、「田上耕作」の調査は、「それは風呂敷包みに一杯あつた。足で歩いて蒐めた彼の「小倉日記」だ」という形に結実する。その一枚目はおそらく調査の起点となった『鷗外全集』に収められた森於菟「後記」に関する記述だろう。そこから始まった聞き取りによって「麻生作男」など、「時間の土砂が、痕跡を到るところで埋めている」人々の姿を再び発掘したのである。「も早、鷗外が小倉に住んでいたということさえこの町で知つた者は稀だ」という小倉の地を「足で歩いて蒐めた彼の「小倉日記」」において、そこに登場する人々を繋いだのは間違いなく「鷗外」ではなく、「田上耕作」自身である。

さらに、「彼の「小倉日記」」はこの調査を始めるにあたって「一生これと取りくむのだと決めた」という「田上耕作」自身の「日記」ともなっているはずで、そこには「彼」が「次々にさがし出し、「訪ねて歩い」た多くの人々の名前が記されている。そうした意味で、「田上耕作」は決して「孤独」ではないだろう。そして、「田上耕作」という名前もまた、「或る「小倉日記」伝」という小説によって「伝」えられていくのである。

注（1）初出は「三田文学」（一九五二・九）だが、大幅な改稿の後「文藝春秋」（一九五三・三）に掲載された。本稿での引用は特に断りのない限り「文藝春秋」掲載のものに拠る。

（2）平野謙「解説」『或る「小倉日記」伝』（新潮社　一九六五・六）

（3）桑原武夫「解説」『松本清張全集35』（文藝春秋　一九七二・七）

（4）大塚美保「松本清張『或る「小倉日記」伝』――〈作者の意図〉を越えて――」『鷗外を読み拓く』（朝文社　二〇〇二・八）

（5）山崎一穎「『或る「小倉日記」伝』――事実と虚構の交叉――」『森鷗外論攷』（おうふう　二〇〇六・一二）

（6）松本和也「昭和一〇年代における〈森鷗外〉――太宰治「女の決闘」から／へ」『昭和一〇年代の文学場を考える』（立教大学出版会　二〇一五・三）

（7）松本清張『両像・森鷗外』（文藝春秋　一九九四・一一）

（8）須田喜代次「浄書される日記――鷗外「小倉日記」考――」『位相　鷗外森林太郎』（双文社出版　二〇一〇・七）

（9）岩下俊作「鷗外先生と小倉の人々」『鷗外全集月報18』（岩波書店　一九五二・一一）

（10）松本清張『清張日記』（日本放送出版協会　一九八四・一一）昭和五五年一月三〇日の項。

（11）岩下俊作「鷗外先生と小倉の人々」（前掲注（9））

（12）松本清張「私註「小倉日記」抄」『鷗外全集月報25』（岩波書店　一九五三・六）

（13）松本清張「私註「小倉日記」抄」（前掲注（12））

（14）森於菟「後記」『鷗外全集　著作篇　第二十巻』（岩波書店　一九三七・五）

（15）宗像和重「全集の本文」『投書家時代の森鷗外』（岩波書店　二〇〇四・七）

（16）斎藤茂吉「後記」『鷗外全集　著作篇　第十八巻』（岩波書店　一九三七・八）。なお、「再び和気清麻呂と足立山との事に就きて」の初出は正確には「門司新報」明治三六年一月五日だが、「或る「小

倉日記」伝」中では「明治三十五年」となっている。これは「三田文学」版から「文藝春秋」版への改稿時に生じた誤りである。

(17) 刊行会版『鷗外全集』の編纂過程については、森富、阿部武彦、渡辺善雄『鷗外全集の誕生――森潤三郎あて与謝野寛書簡群の研究』(鷗出版　二〇〇八・五)、山崎一穎「刊行会版『鷗外全集』編輯過程考」(『日本近代文学館年誌　資料探索』二〇一四・三)を参照。

(18) 森潤三郎「読者諸賢に」『鷗外全集月報　第十六号』(鷗外全集刊行会　一九三一・六)。なお、刊行会普及版全集の月報に関しては、鷗出版編集室編『鷗外全集刊行会版『鷗外全集』資料集』(鷗出版　二〇〇九・一〇)所収の影印を利用した。

(19) 無署名「稟告―国民図書、脱退―」『鷗外全集月報　第七号』(鷗外全集刊行会　一九三〇・八)

(20) 森潤三郎「読者諸賢に」(前掲注(18))

(21) 無署名「編輯部より」『鷗外全集月報　第一号』(鷗外全集刊行会　一九二九・六)

(22) 無署名「編輯部より」『鷗外全集月報　第二号』(鷗外全集刊行会　一九二九・七)

(23) 無署名「編輯部より」(前掲注(21))

(24) 無署名「編輯部より」『鷗外全集月報　第八号』(鷗外全集刊行会　一九三〇・二)

(25) 無署名「編輯部より」『鷗外全集月報　第十号』(鷗外全集刊行会　一九三〇・一〇)

(26) 平野生「鷗外全集を編輯しながら」「明星」一九二三・七

(27) 与謝野寛「鷗外全集第十八巻の後に」『鷗外全集　第十八巻』(鷗外全集刊行会　一九二七・一〇)。ここで「岩田準一郎」とあるのは「岩田準一」の誤り。森潤三郎「霞亭の書簡と伝記増訂資料」(『鷗外全集月報　第十四号』鷗外全集刊行会　一九三一・五)に「霞亭と同国なる鳥羽の岩田準一氏が熱心に調査された資料を続々私の手元に送つて下さつた」とあり、岩田準一は『北条霞亭』の考証に協力している。

(28) 小嶋政二郎「編纂者の辞」『鷗外全集　第十六巻』(鷗外全集刊行会　一九二四・五)

(29) 「諸家の鷗外観(其一)」「鷗外研究　臨時号」(岩波書店　一九三六・六)、「諸家の鷗外観(其二)」「鷗外研究　第二号」(岩波書店　一九三六・七)、「諸家の鷗外観(其三)」「鷗外研究　第三号」(岩波書店　一九三六・八)、「諸家の鷗外観(其四)」「鷗外研究　第五号」(岩波書店　一九三六・一〇)、「諸家の鷗外観(其五)」「鷗外研究　第六号」(岩波書店　一九三六・一一)

(30) 無署名「新輯定版　鷗外全集　著作篇(広告)」「東京朝日新聞」一九三六・五・二八

(31) 「諸家の鷗外観(其一)」(前掲注(29))

(32) 「諸家の鷗外観(其三)」(前掲注(29))

(33) 岩波版第一次全集の月報にも船越政一郎、岩田準一の名は記されている。ただ、「船越氏の先考政一郎氏」(無署名「本全集の「後記」――船越章氏の非難について――」『鷗外研究　第十七号』岩波書店　一九三七・一二)とあり、船越政一郎はこの時既に亡くなっていたようだ。岩田準一は「埋木とジヤン・クリストフ」(『鷗外研究　第三十四号』岩波書店　一九三九・八)という文章を書いている。

(34) 森潤三郎『鷗外森林太郎』(森北書店　一九四二・四)

(35) 山崎一穎「『或る「小倉日記」伝』」(前掲注(5))

(36) 麻生作男「小倉の森先生」『鷗外全集月報　第八号』(岩波書店　一九五二・一)

(37) 大塚美保「松本清張『或る「小倉日記」伝』」(前掲注(4))

※引用にあたり、旧字は適宜新字にあらため、ルビは省略した。

※本稿は、早稲田大学国文学会二〇一五年度秋季大会(一二・五)での口頭発表に基づくものです。発表に際して貴重なご意見を賜った会場のみなさまに感謝申し上げます。